

学位論文審査の要旨

		要 旨
学位申請者	安城 寿子【論文博士】(比較社会文化学専攻 平成26年3月単位修得退学)	<p>本論文は、フランスで形作られた、定期的にスタイルが更新される「モード」のシステムと内実の日本における受容の歴史やそれに伴う問題を、婦人服を中心に第二次世界大戦をまたいで戦前と戦後を断絶なくたどり、論じたものである。本論では戦前、着物の文様をめぐる、百貨店が主導する形でメディアと連動した「モード」のシステムが既に成立していたことを指摘し、洋服の一般化とともに日本において「モード」をめぐる概念が形成されてゆく過程を田中千代の著作を中心に分析した。さらに着物と洋服を融合させた日本独特の服飾を模索する試みが「モード」の枠組みと関わりながら展開していた可能性を、斎藤佳三の事例を通し、新資料の検討を含め明らかにした。続いて戦後の裁縫文化を背景にクリスチャン・ディオールに代表される海外の「モード」の受容が本格化し、それに対する対抗的な試みも行われたことを論じながら、AD センターや中村乃武夫の果たした役割を歴史的に位置づけ、和服／洋服が相互に絡み合いながら日本における「モード」の受容をめぐる葛藤が展開された歴史を描いている。本論は綿密な実証的調査を通して、常に更新され続けると同時に独創性が求められる「モード」が定着すればするほど、「日本」の独自性が意識される構造を示し、従来の言説で西欧のジャポニズムの眼差しにより不変の本質として他者化されてきた着物もまた、モードを受容する日本近代の服飾史に、変化を伴いながら密接に関わってきたことを明らかにした。先行研究に欠けていた戦前と戦後を繋ぐ視点、および斎藤佳三の未公開資料の検討や、戦後のAD センターや中村乃武夫の歴史的な位置づけも、研究上の成果として高く評価された。本論文は昨年度提出され、最初の審査で構成上の問題が指摘されたため、大幅に構成を修正し、新たな資料調査の結果を加えた原稿をもとに本年度の審査を行った。本年度第一回の審査で、修正が高く評価される一方、紳士服についての附論の削除とそれに伴う序文の部分的修正が求められ、適切に対応がなされた。公开发表での質疑応答も的確に行われ、著者の広範な知識が示された。現代の状況認識とも結びついた問題意識は明確で、精緻な実証に裏付けられ、学際的な広がりを持った意義ある研究として、審査委員会はこれを合格とし、博士(学術)、Ph. D. in Design History の学位に値すると結論づけた。</p>
論文題目	近代日本服飾とモードの関係をめぐる歴史的研究	
審査委員	(主査) 教授 天野 知 香	
	教授 小 風 秀 雅	
	准教授 谷 口 幸 代	
	助教 田 中 琢 三	
	関東学院大学 教授 神 野 由 紀	
インターネット 公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否 (可 ・ 否)</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <p>ア. 当該論文に立体形状による表現を含む</p> <p>イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</p> <p>☑. 出版刊行されている、もしくは予定されている</p> <p>エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている</p> <p>オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</p> <p>※ 本学学位規則第24条第4項に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	

